



企画書
「ギャンブラー、
聖地に紛れ込む」



20250407



エリー



目次

100 文字のキャラクターセンテンス	1
300 文字のストーリーアブストラクト	2
2000 文字プロット 202504021146 文字	3
01 企画書	5
02 設定	10
プロットにあわせて、ストーリー構成を整理する	13
段階執筆手順	17
試し書き「01 ユウ」	19
試し書き「02 聖地」	20
プロットの感想	22
初稿 01 ユウ	23
初稿 02 噂	24
初稿 03 聖地への道	25
GEMINI「B、聖地クローバー」	27
GEMINI「C、サクラ」	29
GEMINI「D、係決め」	31
GEMINI「E、村長リョウとの対立」	34
GEMINI「F、リスクとりターン」	36
GEMINI「G、村祭り」	38
GEMINI「H、責任者」	40
GEMINI「I、逃亡」	43
GEMINI「J、トークのブーメラン」	45
GEMINI「K、戦略」	48
GEMINI「L、訪問」	50
GEMINI「M、大勝負」	52
GEMINI「N、約束」	54
GEMINI の初稿の感想	56

100 文字のキャラクターセンテンス

うまく行かないことがある度逃げてきた主人公が、大切なものを見つけて、負けられない勝負をする話。

47 文字

300 文字のストーリーアブストラクト

万馬券で起業したギャンブラーは倒産後、政府の実験場「聖地クロバー」へ。そこで彼は、リスクを恐れ前例に従う村人たちを嘲笑し、持ち込んだダイスで娯楽を広めます。しかし、村人の運命をかけた勝負に挑むことになり、初めて彼らの心情を理解します。恐怖から逃避しようとしませんが、過去の言葉を村人に返され、覚悟を決め勝負に勝利。他者の人生を背負う勇気を知る物語です。

176 文字

2000 文字プロット 202504021146 文字

主人公

主人公ユウは、万馬券を当てて、起業して、多額の借金から逃げるため、聖地クロバーにたどり着く。

ボロボロの定食屋で、ユウは「聖地クロバー」の噂を耳にする。

神を逆恨みしているユウは、文句を言いクロバーに行くことにする。

しかし、屈強な男たちに取り押さえられてしまう。

恨み言を言うユウに対して、村長リョウは、ハッキリ否定する。

「神は無力だ。ここは、自分たちの力で生きる場所だ」

死ぬか、残るか、問われる。

失うものがないユウは村に残ることを即答する。

聖地クロバー

翌日、日の出と共に起き出して、掃除することを求められる。

グリーンさまの体内に住むわたしたちは、環境を整え、清潔に保つことが大切と考える。

朝食前にみんなで掃き掃除、拭き掃除をする。

最初の友だちサクラ

掃除が終わって、ご飯と味噌汁の質素な朝食にありつく。

あまりの少なさに、ユウは隣の席の女の子に、朝食を掛けて勝負する。

子どもたちも賭けはじめて騒動になる。

→ここでサクラに言った言葉を、ユウが逃げようとしたとき言い返される。

仕事

仕事を選ぶことを求められ、畑に行く。

昼食でおにぎりを食べる若者たちとダイスを振りながら、村のことを教えてもらう。

→設定の説明

村長リョウとの対立

ユウは村の運営係を希望する。

よそ者に反感を持つ村人リョウとダイス勝負する。

ユウが勝って祭りを企画する。

リスクとリターン

ゲームを通じて、リスクとリターンをユウが教える。

村祭り

ダイスを使ったゲームやイベントを通して、村人たちが普段とは違う娯楽に熱狂し、童心に帰って楽しむ様子を描く。

→村人が保守的ではなくなっていく。

責任者

村祭りの成功で、村の重要な課題を打ち明けられる。

→ユウは、村長リョウにダイスを流行らせたことの責任を問われる。

逃亡

「失敗しても逃げればいい」と安易に考えてきたユウは、他人の人生に影響を受ける経験を始めてする。

村人が前例に従ってしまう気持ちをはじめて知る。

自分は、村人以下と悟り、逃亡を企てる。

サクラ

探しに来たサクラに「迷ったらダイスを振れ」と言い返されて、ダイスを振ることになる。

戦略

ユウは村人と協力して、「状況を把握して、具体的な計画を建て、実行しては修正する」という戦略的な行動を取る。

瞬間的な勝負ではなく、長い時間計画して行動する粘り強さを学びながら、村人にも教える。

その結果、村で経験を積んだサクラが、アメリカに旅立つ。

依頼

サクラがグリーン教を布教する。アメリカから使者が来る。

大勝負

ユウが中心になって、アメリカの使者をもてなす。

接待は成功する。

しかし、報道されたことで、借金取りに見つかり、ユウは捕まる。

約束

罪を償い、戻ってくることを約束して、ユウが聖地クローバーを去る。

01 企画書

0、タイトル

ギャンブラー、聖地に紛れ込む

1、媒体・メディア

電子書籍で無料公開

2、企画意図（箇条書きで）

- A、グリーン教という生活模範がある世界を描いて、よいか、わるいか、読者に「もしも」を楽しんでもらいたい。
- B、稼ぐ人が必要なのに、リスクを怖がる心理を描いて共感してもらいたい。
- C、読んだあと、戦略的に動くことを身近な作業で意識できるようになってほしい。

3、いちばんやりたいこと（テーマ・メッセージ・主張）

単発の最善で完璧を目指してオーバーワークを改め、全体を最適化することが大事と子どもたちに伝えたい。

4、世界観（ギミック・舞台設定・世界設定）

トゥンリリミスの続き。ニニーの改革を継いだリリーが、政府の依頼で作った村を舞台に、共産主義の課題と向き合う。

5、セールスポイント

聖地クロバーはユートピアか、ディストピアか、未来の青写真を提示する。

6、ターゲット

中高生。

7、主要人物（キャラクター）

ユウはギャンブラー。

サクラは聖地クローバーの子ども。

リュウは聖地クローバーの村長。

8、全体あらすじ（プロット）

夜逃げしたギャンブラーが、聖地クローバーに紛れ込み、現代の価値観と比較しながら、納得してグリーン教徒になる話。

9、醍醐味（新規性・独自性）

グリーン教と制度の独自性。

汎用ストーリー構成

○オープニング

1 登場（主人公は父を勇者に持った青年）

主人公について書く

万馬券を当てたギャンブラーが、起業して借金を背負う。

2 背景（人類は魔王軍と一進一退の戦いをしている）

世界設定を簡潔に示す

聖地クローバーを知り、主人公は神に文句を言おうとする。

3 発端（魔王軍の大攻勢により父の勇者が落命）

異変・事件を起こす

村人に捕まり、死ぬか、村に残るか、問われる。

4 目的（勇者を失った人類は存亡の危機にさらされる）

問題や課題を明確化する

聖地クローバーは、国を支える基幹産業を生み出すための子育てなのに、生み出せずにいる。

5 初動（主人公は父の後を継ぎ勇者として魔王討伐へ）

主人公の決意と覚悟をさせる

7つのダイスを使って、村人から富と財産を巻き上げようと決意する。村人をバカにしている。

【つかみ終わりポイント】

6 障害（主人公は実力不足で苦戦を強いられる）

行動させて試練にぶつけさせる

日の出から掃除させられ、少ない朝食に切れて、子どもと賭けをする。

→こどもの子育て文化については知ることができる。

→サクラがおこづかいで買ったお菓子を巻き上げようとする。

→主人公は失敗してしまう。

→しかし「また遊んでね!」と菓子を施される。

7 助力（師匠との出会いで修行をつけてもらう）

ヒントや助けを得させる

村人とダイスで賭けをして、情報を入手する。

運営を希望する人がいなくて、30年村長のリュウが担当している。

8 達成（勇者の資質が開花しパワーアップする）

成果と成長を実現する

運営を希望して、村長リョウと勝負する。

→勝って、祭りを任される。

9 難問（ジリ貧の人類は中枢を叩く作戦に出る）

新たな問題を発生させる

稼げる人材が排出できない問題から、実験が打ち切れそう。

10 無援（勇者一行は魔王軍支配下の土地へ侵攻）

助け無しで苦境に挑む

主人公は、村人の人生を背負って行動することが怖くなる。

11 窮地（人類側の支援を受けられぬ苦闘が続く）

危機と絶望を味わわせる。

主人公が、村から逃げ出す。

12 光明（父勇者が残した魔王討伐の秘策に気づく）

逆転の起死回生の一手を示す

探しに来たサクラに、主人公は自分の口癖を言い返される。

【たたみ初めポイント】

13 勝負（魔王の居城での最終決戦に臨む）

最終課題と対決・対峙させる

戦略的に行動して、村の子どもを目的に向かって行動できるようにする。

→結果としてサクラがアメリカに行く。

14 結末（仲間と力を合わせて魔王を撃破）

決着と結果を示す

アメリカの使者と交流して、聖地クローパーが報道される。

15 閉幕（戦いで荒んだ土地の再生に従事するため新たな旅へ）

おまけで後日談を書いてもいい

報道を見た借金取りに捕まる。

→戻ることを約束して聖地クローバーを去る。

02 設定

世界設定

○舞台

時代、現代日本

場所（惑星、大陸、海、島）
愛知の山奥の聖地クローバー

○属人設定

生活環境
規範が宗教生活

教育
お手伝い文化

その他
共産主義
衣食住に差はない。
発言件に差がつく。

○事情設定

歴史
戦後に作られた政府の実験場。
リリーは過去から学び、自由や人権を無制限に与えれば衰退すると知っていた。だから
衰退回避の方法を色々試した。

いくつかあった村のうち、残ったのは聖地クローバーだけ。

○特筆設定

ルール

グリーン教の教えに従う。

才能があるなら、周りのために生かすことが求められる。

問題点・課題

前例主義になり、村が停滞している。

コンセプト設定

○ストーリーコンセプト

テーマ

楽園を作る

主張

チャレンジは必要

メッセージ

挑戦しないと衰退する

お約束

罪はつぐなう。

語り口・語り方

ユウの主人公視点。

その他

ダイス

○特筆コンセプト

サプライズアイデア

グリーン教

○雰囲気コンセプト

明るい雰囲気

ギャグでいく

愛されキャラ主軸

笑わせる方向

泣かせる方向

プロットにあわせて、ストーリー構成を整理する

作業メモ 20250402

シーンにあわせて、キャラクターの役割を考えて、葛藤が生まれるように流れを考える。

A、主人公

主人公ユウは、万馬券を当てて、起業して、多額の借金から逃げるため、聖地クローパーにたどり着く。

ボロボロの定食屋で、ユウは「聖地クローパー」の噂を耳にする。

神を逆恨みしているユウは、文句を言い、クローパーに行くことにする。

しかし、屈強な男たちに取り押さえられてしまう。

恨み言を言うユウに対して、村長リョウは、ハッキリ否定する。

「神は無力だ。ここは、自分たちの力で生きる場所だ」

死ぬか、残るか、問われる。

失うものがないユウは村に残ることを即答する。

- 1、万馬券を当てたギャンブラーが、起業して借金を背負う。
- 2、聖地クローパーを知り、主人公は神に文句を言おうとする。
- 3、村人に捕まり、死ぬか、村に残るか、問われる。

B、聖地クローパー

翌日、日の出と共に起き出して、掃除することを求められる。

グリーンさまの体内に住むわたしたちは、環境を整え、清潔に保つことが大切と考える。

朝食前にみんなで掃き掃除、拭き掃除をする。

C、最初の友だちサクラ

掃除が終わって、ご飯と味噌汁の質素な朝食にありつく。

あまりの少なさに、ユウは隣の席の女の子に、朝食を掛けて勝負する。

子どもたちも賭けはじめて騒動になる。

→ここでサクラに言った言葉を、ユウが逃げようとしたとき言い返される。

6、日の出から掃除させられ、少ない朝食に切れて、子どもと賭けをする。

→こどもの子育て文化については知ることができる。

→サクラがおこづかいでかったお菓子を巻き上げようとする。

→主人公は失敗してしまう。

→しかし「また遊んでね!」と菓子を施される。

D、仕事

仕事を選ぶことを求められ、畑に行く。

昼食でおにぎりを食べる若者たちとダイスを振りながら、村のことを教えてもらう。

→設定の説明

4、聖地クローバーは、国を支える基幹産業を生み出すための子育てなのに、生み出せずにいる。

5、7つのダイスを使って、村人から富と財産を巻き上げようと決意する。村人をバカにしている。

7、村人とダイスで賭けをして、情報を入手する。

→運営を希望する人がいなくて、30年村長のリュウが担当している。

E、村長リュウとの対立

ユウは村の運営係を希望する。

よそ者に反感を持つ村人リュウとダイス勝負する。

ユウが勝って祭りを企画する。

8、運営を希望して、村長リュウと勝負する。

→勝って、祭りを任される。

F、リスクとリターン

ゲームを通じて、リスクとリターンをユウが教える。

G、村祭り

ダイスを使ったゲームやイベントを通して、村人たちが普段とは違う娯楽に熱狂し、童心に帰って楽しむ様子を描く。

→村人が保守的ではなくなっていく。

H、責任者

村祭りの成功で、村の重要な課題を打ち明けられる。

→ユウは、村長リョウにダイスを流行らせたことの責任を問われる。

9、稼げる人材が排出できない問題から、実験が打ち切れそう。

I、逃亡

「失敗しても逃げればいい」と安易に考えてきたユウは、他人の人生に影響を受ける経験を始めてする。

村人が前例に従ってしまう気持ちをはじめて知る。

自分は、村人以下と悟り、逃亡を企てる。

10、主人公は、村人の人生を背負って行動することが怖くなる。

11、主人公が、村から逃げ出す。

J、サクラ

探しに来たサクラに「迷ったらダイスを振れ」と言い返されて、ダイスを振ることになる。

12、探しに来たサクラに、主人公は自分の口癖を言い返される。

K、戦略

ユウは村人と協力して、「状況を把握して、具体的な計画を建て、実行しては修正する」という戦略的な行動を取る。

瞬間的な勝負ではなく、長い時間計画して行動する粘り強さを学びながら、村人にも教える。

その結果、村で経験を積んだサクラが、アメリカに旅立つ。

13、戦略的に行動して、村の子どもを目的に向かって行動できるようにする。

→結果としてサクラがアメリカに行く。

L、依頼

サクラがグリーン教を布教する。アメリカから使者が来る。

M、大勝負

ユウが中心になって、アメリカの使者をもてなす。

接待は成功する。

しかし、報道されたことで、借金取りに見つかり、ユウは捕まる。

14、アメリカの使者と交流して、聖地クローバーが報道される。

N、約束

罪を償い、戻ってくることを約束して、ユウが聖地クローバーを去る。

15、報道を見た借金取りに捕まる。

→戻ることを約束して聖地クローバーを去る。

段階執筆手順

わたしの最終成果物は小説だから、

1、小説の初稿

2、シナリオ

に変えた方がよさそう。

シナリオ→初稿だと文字にならない表現を使って、後で困る。

試し書きである初稿は、筋の確認として必要だ。足りない場面も見えてくる。

プロットを節の分量に具体化することで、エピソードの要/不要が見えてくる。

A、初稿はストーリー展開が分かればよし。

B、シナリオで、視覚に直す。

C、2 稿で演出 (情報の伝え方) を意識して書き直す。

D、3 稿以降で文章表現を練っていく。

初稿は、1000 から 1200 文字のプロットに、加筆するだけ。

最低限の描写で、パッパカすすめていい。

筋と題材の確認。

シナリオはキャラの役割と見せる量の確認。

2 こうは、みせる、みせない、見せ方など情報コントロール。

→読者の疑問をコントロールして、興味を持ったことを書いていく小説独特の伝え方。

→コールアンドレスポンス。

3 校でリズムや韻律を含む、読みやすさ。

→音読してみる。

→見映えの意識。

キャラの対比ができてないのに、文章表現に凝っても、書き直す可能性が高い。

意図と情報を整理してシンプルにするなら、ちょっとずつ作り込んでいくほうがよさそう。

いきなり最終型を目指さない。

試し書き「01 ユウ」

俺は、10面ダイスを3回振った。

神が示したのは6、3、8。

三連単でボックスなら、6通り600円が必要。

当たれば万馬券もありうる。

所持金は632円。

100面ダイスで1から5なら全額突っ込む。

「勝負！」

3が出る。

外れたら夜逃げ確定。

ボロアパートの家賃はたった1万円。それなのに3ヶ月払えてない。

電気、ガス、水道は3ヶ月前から止まっている。

ファンファーレが鳴り響き、期待が高まる。

パン！

耳をふさげ。目を閉じろ。レースは見るな。結果がすべてだ。

当たることだけ考えろ。金さえあれば商売で儲けられる。

3分に満たないレースが永遠に感じられる。

無音の闇に包まれる。

俺には肉親もなく、恋人も、友だちもいない。

世界と俺をつなぐものは馬券だけ。

結果を知らぬまま、機械で払い戻しを試す。窓口へ行くように指示が出る。

配当金が100万以上なのか？

コソコソと窓口に行く。

(っしゃあ！ 配当金284万4100円ゲットだぜ！)

俺の名はユウ。32歳、独身。職業、ギャンブラー。

試し書き「02 聖地」

早速、配当金で家賃や光熱費を払う。

「残り 200 万。さらに増やしてやるぜ！」

調子に乗った俺は、自宅前に輸入雑貨の看板を出す。

客より先に営業マンが来る。

気がつけば、売れ残った雑貨と、フルカラーで印刷された高級ダイレクトメールの山。

そして、無情にも届く、請求書の山。

「.....夜逃げ、するしかねえか」

こうして、俺は都会の喧騒から逃れ、山奥へと辿り着いた。ボロボロの定食屋で、俺は「聖地クローバー」の噂を耳にする。

そこは戦後に政府が作った実験場で、リリーという魔法使いが伝えたグリーン教を信仰する血族が住んでいるらしい。

「グリーンさまねえ.....。俺の人生、めちゃくちゃにしゃがって.....」

神への恨み節を呟きながら、俺は村へと向かった。

ここにも緊張と緩和を作ったら？

最短の獣道か、最長の舗装された道路か？

「戻れ！」と警告される？

獣道選んで、人影から逃げているつもりで、誘導される。

夜、村に着いた途端、屈強な男たちに取り押さえられ、拘束されてしまう。

「神は無力だ。ここは、自分たちの力で生きる場所だ」

村長は冷たい声で俺に問う。

「村の一員になるか、死か、どちら」

俺は言い終わる前に即答した。

「村に残る！」

外に未練なんて、あるわけない。

こうして、元ギャンブラー、ユウの聖地クローバーでの新生活が幕を開けた。

与えられた質素な家に入る。

おもむろにポケットに手を突っ込む。

愛用の7種類のダイスを取り出す。

「俺にはこれがある！」

ニヤリと笑い、ダイスを弄び始めた。

プロットの感想

サクラが玉の輿で成功したように感じる。

→アメリカにも、グリーン教の村はあった。リリーが作った。

→しかし、リーダーが生まれず、崩壊してしまった。

→サクラがリーダーとなり、生まれ変わらせた。

→メンバーを入れ換えて、交流させることになる。

それを SNS に流されて、借金取りが来る。

初稿 01 ユウ

俺は、10 面ダイスを 3 回振った。

神が示したのは 6、3、8。

三連単でボックスなら、6 通り 6 0 0 円が必要。

当たれば万馬券もありうる。

所持金は 632 円。

100 面ダイスで 1 から 5 なら全額突っ込む。

「勝負！」

3 が出る。

外れたら夜逃げ確定。

ボロアパートの家賃はたった 1 万円。それなのに 3 ヶ月払えてない。

電気、ガス、水道は 3 ヶ月前から止まっている。

ファンファーレが鳴り響き、期待が高まる。

パン！

耳をふさげ。目を閉じろ。レースは見るな。結果がすべてだ。

当たることだけ考えろ。金さえあれば商売で儲けられる。

3 分に満たないレースが永遠に感じられる。

無音の闇に包まれる。

俺には肉親もなく、恋人も、友だちもない。

世界と俺をつなぐものは馬券だけ。

結果を知らぬまま、機械で払い戻しを試す。窓口へ行くように指示が出る。

配当金が 100 万以上なのか？

コソコソと窓口に行く。

(っしゃあ！ 配当金 284 万 4100 円ゲットだぜ！)

俺の名はユウ。32 歳、独身。職業、ギャンブラー。

初稿 02 噂

早速、配当金で家賃や光熱費を払う。

「残り 200 万。さらに増やしてやるぜ！」

調子に乗った俺は、自宅前に輸入雑貨の看板を出す。

客より先に営業マンが来る。

気がつけば、売れ残った雑貨と、フルカラーで印刷された高級ダイレクトメールの山。

そして、無情にも届く、請求書の山。

「.....夜逃げ、するしかねえか」

こうして、俺は都会の喧騒から逃れ、山奥へと辿り着いた。ボロボロの定食屋で、俺は「聖地クロバー」の噂を耳にする。

そこは戦後に政府が作った実験場で、リリーという魔法使いが伝えたグリーン教を信仰する血族が住んでいるらしい。

「グリーンさまねえ.....。俺の人生、めちゃくちゃにしゃがって.....」

神への恨み節を呟きながら、俺は村へと向かった。

初稿 03 聖地への道

夕闇の中、舗装された山道を黙々と歩く。
二股に分かれた道の真ん中に看板がある。

「戻れ！」

警告されている？

右手には下草におおわれた急な獣道。
左手には舗装された緩やかな長いカーブ。

「奇数なら右、偶数なら左」

6面ダイスを缶のケースの蓋に落とす。
結果は3。

「見つからないように潜入するなら、姿の隠れる獣道か……」

俺は踏み出す。
リンリンリン。
鳴り響く鈴の音に、足音が重なる。
姿は見えない。
足音だけが聞こえる。
とっさに座り込み茂みに隠れる。

人か、獣か。

「助けて、神さま！」

祈った瞬間、頭に重い痛みが走り、俺は意識を失う。

目が覚めると屈強な男たちに取り押さえられている。
あたりは暗くて何も見えない。
朗々とした声だけが響く。

「神は無力だ。ここは、自分たちの力で生きる場所だ」

村長は俺に問う。

「村の一員になるか、死か」

相手が言い終わる前に、おれは即答した。

「村に残る！」

外に未練なんて、あるわけない。

おもむろにポケットに手を突っ込む。

愛用の7種類のダイスを取り出す。

「俺にはこれがある！」

ニヤリと笑い、ダイスを弄び始めた。

こうして、ギャンブラー、ユウの聖地クローバーでの新生活が幕を開けた。

GEMINI「B、聖地クローバー」

早朝、けたたましい鳥のさえずりで無理やり意識を引き上げられる。寝ぼけ眼を擦りながらボロ小屋から顔を出すと、目に飛び込んできたのは、想像をはるかに超えた異様な光景だった。

山深いこの場所に、まるで時代劇に出てくるような村が広がっている。土壁と茅葺屋根の家々が、朝日を浴びてぼんやりと浮かび上がり、そこで生活する村人たちの姿もまた、時代錯誤も甚だしい。麻のような素朴な生地で作られた、き나りの揃いの衣を身につけ、竹籠を背負い、竹箒を手をしている。

「おい、あんたもこっちだ」

昨日、俺を捕らえた屈強な男の一人が、ぶっきらぼうに声をかけてきた。促されるままに広場へ向かうと、老若男女問わず、村人たちが黙々と地面を掃き清めている。

「グリーンさまの体内に住まわせてもらっている我々は、環境を整え、清潔に保つことが肝要なのです」

昨夜選択を突きつけてきた、村長らしき人物が言っていた言葉が蘇る。

(グリーンさま？ 体内に住む？
一体何のことだ？)

戸惑いを隠せない俺を尻目に、村人たちは一心不乱に箒を動かしている。その間、誰一人として言葉を発しない。まるで、掃除そのものが儀式であるかのように。

「えっと」

俺が質問しようとする、村長らしき人物が遮るように命令する。

「今はグリーンさまと語り合う時間だ。しゃべるな！」

俺は黙ってうなずく。

(グリーンさまと語り合う時間、ねえ……)

昨日の今日で、そんな奇妙な話を信じられるはずもない。だが、この異様な共同体の中で生きていくためには、郷に入っては郷に従え、ということなのだろう。

見よう見まねで、俺も隅っこに置いてあった竹箒を手取る。カサカサという乾いた音だけが響く中、俺は所在なさに地面を掃き始めた。

（グリーンさまにとって何がいいのか、正直さっぱりだ。だが..... まあ、綺麗になる方が、気分も悪くねえか）

まるで、自分の腹の中にいる見えない何かのために掃除をしているような、奇妙な感覚に襲われる。

かつて神に裏切られ、全てを失った俺にとって、「グリーンさま」なる存在が何なのかはわからない。それでも、この閉鎖された空間で生きていくためには、彼らのルールに従うしかないのだろう。

ギャンブラーとして生きてきた俺には、先の見えない状況ほど燃えるものはない。この「聖地クローバー」とやらで、一体何が待ち受けているのか。そして、あの村長が言った「自分たちの力で生きる」という意味とは――。

竹箒を握る手に、かすかな力がこもった。俺の新たなゲームが、静かに幕を開けようとしていた。

GEMINI「C、サクラ」

日の出と共に始まった強制的な清掃活動を終え、ようやくありつけた朝食は、質素という言葉がぴったりだった。麦飯に味噌汁、そして申し訳程度の漬物。昨日の晩飯も似たようなものだった気がする。都会のジャンクフードに慣れた俺の腹には、あまりにも物足りない。

隣の席で同じように朝食を摂っているのは、十歳くらいの小柄な女の子だった。くりっとした大きな瞳が印象的で、名前は確かサクラと言ったか。

腹の虫がぐうぐうと鳴るのをごまかしながら、俺はサクラに話しかけた。

「なあ、お嬢ちゃん。その飯、ちょっと分けてくれねえか？　代わりに、面白い勝負でもしてやるよ」

サクラはきょとんとした表情でこちらを見上げた。

「勝負？」

「ああ。例えば、この箸を箸で挟んで落とさずに何秒持っていられるか、とか。勝った方が負けた方の飯をちょっともらう、ってのはどうだ？」

俺の提案に、サクラの瞳が少し輝いた。子供心に、勝負という言葉は魅力的なのかもしれない。

「うん、いいよ！」

サクラの同意を得た途端、周りの子供たちが面白がり、わらわらと集まってきた。

「僕もやる！」

「私も混ぜて！」

あっという間に、朝食の質素なテーブルは、子供たちの興奮した声で騒がしくなった。中には、自分の朝食を賭けようとする子まで現れた。

(こいつら、朝から元気だな……)

俺は内心苦笑しながらも、久しぶりの賑やかさに少しでも心が躍った。

サクラとの箸の耐久勝負は、俺があっけなく箸を落として負け、俺の麦飯を少し分けた。

しかし子供たちの賭け熱は冷めやらず、今度は誰が一番早く味噌汁を飲み干せるか、という勝負が始まった。

その時、サクラが小さな包みを取り出した。色とりどりの包装紙に包まれたそれは、どうやら彼女がわずかなお小遣いで買ったお菓子のようだ。

「ねえ、ユウさん。これ、あげる」

サクラはそう言って、そのお菓子を俺に差し出した。

「え…….いいのか？」

まさか、見ず知らずの俺にくれるとは。さっきまで飯を賭けて勝負していた相手なのに。

「うん。ユウさん、お腹空いてるでしょ？」

その純粋な親切さに、俺は言葉を失った。都会で生きてきた俺には、打算のない他人の親切など、ほとんど記憶がない。

「ありがとうよ」

素直に礼を言うと、サクラはにっこりと笑った。

「また、一緒に遊んでね！」

その笑顔は、朝日よりも眩しく、俺の胸の奥にじんわりと温かいものを灯した。

(ここの子供たちは…….一体どう育っているんだ?)

質素な食事、集団での清掃、そして予期せぬ優しさ。聖地クローバーでの生活は、まだ始まったばかりだが、早くも俺の常識を揺るがす出来事が起こり始めていた。

GEMINI「D、係決め」

食後に村長に呼ばれた。

今日から村の一員として働くことになるらしい。

与えられた選択肢はいくつかあったが、特に興味を引くものもなく、成り行きで畑の仕事を選んだ。

鋤を握るのは初めての体験。

土の匂いを嗅ぎながら、ぎこちない手つきで畑を耕していると、昼食の時間になった。

木陰に集まっておにぎりを頬張る若い衆の中に、俺も混ぜてもらうことにした。

「ユウさん、都会から来たんだって？」

気さくな若者が話しかけてきた。

「ああ、まあな」

俺が適当に答えると、別の若者が興味深そうに身を乗り出してきた。

「この村のこと、まだ全然知らないでしょ？ よかったら、俺たちが教えてやるよ」

そう言うと、彼らは腰を下ろし、聖地クローバーの奇妙な仕組みを語り始めた。

「この村には、『ローサイクル』と『ハイサイクル』っていう考え方があるんだ」

「ハイサイクルは、積極的に新しいことに挑戦する人のための道だ。企画を立てたり、新しい作物を育てたり」

(自由競争の資本主義社会と同じだな)

俺がよく知っている厳しい世界なので、軽くうなずく。

「でも、いきなり全員が競争するわけじゃないんだ。まずは自分の意識を集中させること。それができない人は、畑仕事とか、そういう作業を通して訓練するんだよ」

別の若者が補足する。

「ローサイクルは、日々の作業をコツコツとこなす道だ。魂を育てることが、グリーンさまを成長させることに繋がるって教わるんだ。みんな、グリーンさまの体の一部を預かってるから、どんくさくても、やる気さえあれば修行させてもらえるんだ」

(まるで出家した僧侶のような生き方だな)

イメージできず、首をかしげる。

「でも、ただ精神的な成長だけを目指してるわけじゃないんだぜ」

興味がわいた俺は前のめりになる。

「物理的な成功で周りを助ける人も必要だ。そういう人は『在家』的な生き方になる。稼いだお金は、結局この村を守るために使われるんだ」

(なるほど、外の世界とは少し違うが、役割分担があるらしい)

「子供たちは、読み書きと簡単な計算だけは強制的に教わるんだ。生活に必要なことだからな」

別の若者が続ける。

「でも、それ以外は無理強いしない。何かを知りたいって言われたら教えるし、まずは動画を見せたりするんだって。訓練も、遊びみたいなゲームを通して自然に身につくように工夫されている」

(教育方針も独特らしい)

「たまに、自分で何かを企画したり、村の運営に関わろうとする子供もいるけど、ほとんどは掲示板に貼られた依頼をこなすだけなんだ。それさえ難しい子も多いみたいだけだな」

最初の若者が、少し困ったように笑った。

「そういう成長がゆっくりな子には、出家みたいな厳しい修行生活が勧められるんだ。とにかく、周りの人に好かれるように努力しろって言われる。それでも反抗するようなら、十六歳になったら街に追放される」

(厳しい掟もあるようだ)

「実はさ……」

一番年長の若者が、少し声を潜めて言った。

「この聖地クローバーは、もともと国を支えるようなすごい産業を生み出すための子育て実験場だったらしいんだけど……うまくいってないみたいなんだ」

「他の村はもう滅んじゃったんだぜ。海外にもあったらしいけど」

別の若者が付け加える。

「村長の一族は、昔この地にグリーン教を伝えた魔女のリリーさまの血を引いているから、半ば強制的にリーダーになるんだって。もう三十年も、リュウさんが村長をやっている。他にやりたいって人もいないみたいだしな」

彼らの話を聞きながら、俺の中で一つの考えが芽生え始めていた。

七つのダイス。それは俺にとって、神に見捨てられた人生を切り開くための武器だ。

この村の連中は、純粹すぎる。こんな連中から、ダイスを使って富と財産を巻き上げてやる。

俺は心の中で嘲笑しながら、さりげなくポケットから愛用のダイスを取り出し、指先で遊び始めた。

「サイコロなんて何に使うの？」

興味津々の若者たちと、昼飯をかけて、俺は勝負をした。

GEMINI「E、村長リュウとの対立」

数日後、俺は村長リュウの住居を訪れた。簡素な造りの家の中で、彼は静かに目を閉じ、瞑想しているようだった。

「村長、少しお話が」

声をかけると、リュウはゆっくりと瞼を開けた。その瞳には、底知れない威圧感が宿っている。

「何の用だ」

「村の運営係を志願したいのです」

俺の言葉に、リュウの眉がわずかに動いた。

「よそ者の貴様が、この村の運営に口を出すというのはか」

やはり、警戒心は強い。当然だろう。いきなり現れた見慣れない男が、村の根幹に関わる役割を担いたいなどと言い出したのだから。

「ええ。数日この村で生活してみて、いくつか気づいた点があります。祭りを開催するなど、もっと村を活性化できるのではないかと」

リュウは深くため息をついた。

「祭など、無益な騒ぎだ。我々には、日々の勤めとグリーンさまへの祈りがあれば良い」
「しかし、閉鎖的な生活だけでは、活気が失われていくのではないのでしょうか。祭りは、村人たちの交流を深め、新たな刺激を生む機会になるはずです」

俺の言葉に、リュウは冷たい視線を投げかけてきた。

「貴様は、この村の何を知っているというのだ」

「全てを知っているとは言いません。ですが、外の世界のことは多少なりとも知っています。その知識が、この村の役に立つかもしれないと思ったのです」

リュウは腕を組み、じっと俺を見つめた。張り詰めた空気が流れる。

俺は不敵に笑い、自分のポケットから七つのダイスを取り出した。

「ダイスで勝負しませんか？」

俺は軽くルールを伝えた。

「6面ダイスを3回振った合計の多い方が勝ちです」

「ダイスにはグリーンさまの意識が宿るといふ言い伝えがある。いいだろう」

静寂の中、二つのサイコロが同時に宙を舞い、床に落ちる。

リュウの振ったサイコロの目は、3と5と1。合計は9。

俺の目は、6、4、6。合計は16。

明確な差がついた。リュウの表情には、驚愕の色が浮かんでいる。

「.....貴様が勝ったのか」

信じられないといった様子で、リュウはサイコロを見つめている。

「約束は守っていただきましょう」

俺は冷静にそう告げた。

リュウはしばらく沈黙した後、重々しく頷いた。

「分かった。祭りの企画運営は、貴様に任せる。だが、もし期待外れの結果に終われば.....その責任は、しかと取ってもらうぞ」

「心得ています」

俺は小さく笑った。村の運営、そして祭りの企画運営権を手に入れた。これは、この閉鎖的な村に変化をもたらすための第一歩だ。

(どんな祭りにしてやろうか.....)

胸の奥で、新たな企みが胎動し始めるのを感じた。同時に、村長リュウという大きな壁が、俺の前に立ちはだかったことも理解している。だが、困難こそが、ギャングラーの血を騒がせる最高のスパイスなのだ。

この村で、一歩乱起こしてやると心に誓った。

GEMINI「F、リスクとリターン」

祭りの準備を進める中で、俺は村の子供たちと触れ合う機会が増えた。彼らは素朴で純粋だが、どこか言われたことだけをこなしているような印象を受けた。

そんなある日、広場で子供たちが集まって、地面に描かれた簡単なすごろくのようなもので遊んでいた。だが、彼らはただ順番にサイコロを振って駒を進めるだけで、そこに戦略や駆け引きといったものは見られない。

「なあ、お前ら。もっと面白い遊び方があるぞ」

俺はそう声をかけ、彼らの輪に加わった。

「このサイコロの目に、色々なルールを加えてみるんだ。例えば、3が出たら一つ戻る。6が出たらもう一回振れる、とか」

子供たちは興味津々といった表情で俺を見つめた。

「それだけじゃない。止まったマスに、『誰かに肩を揉んでもらう』とか、『お菓子を一つもらう』っていうイベントを書き込むんだ。ただし、『誰かの肩を揉む』とか、『持っているお菓子を一つあげる』っていうマイナスのイベントも用意する」

俺の言葉に、子供たちの目が輝き始めた。

「それって、ちょっとドキドキするね！」

一人の女の子が興奮気味に言った。

「そうだろ？ これが『リスク』と『リターン』ってやつだ。何かを得るためには、何かを失う覚悟も必要なんだ」

俺はそう言って、子供たちと一緒にすごろくのマスに様々なイベントを書き込んでいった。中には、「村長に褒められる」なんていうご褒美マスや、「畑の草むしりを手伝う」なんていう罰ゲームマスもあった。

遊び始めると、子供たちは今まで以上に真剣になった。どのマスに止まるか、次にどんな目を出せば有利になるか、真剣に考えるようになったのだ。

休憩中、一人の男の子が俺に尋ねてきた。

「ねえ、ユウさん。村長はいつも『見返りのない親切はない』って言うんだ。このゲームもそうなの？」

「ああ、村長の言う通りだ。外の世界はゲーム性の高い、勝ち負けのあるルールで動いている。だから自分の利益にならないことはしない」

俺はそう答えた。それは、俺がこれまでの人生で嫌というほど味わってきた現実だった。

別の女の子が、少し難しい顔をして言った。

「村長は、『人権とは自分でやる権利だ』とも言ってた。誰にも他人にやってもらふ権利はないって」

「それも、このゲームに当てはまるな。誰かに助けてもらうのは嬉しいけど、ずっと誰かに頼っていてばかりじゃ、このゲームでは勝てないだろ？　自分の力でサイコロを振り、自分でコマを進めるしかないんだ」

俺はそう言って、自分のコマを力強く進めた。

リュウの教えは、一見厳しくも聞こえるが、この聖地クローバーで生きていくためには必要な考え方なのかもしれない。

見返りを求めない親切は長続きしないし、自分の人生は自分で切り開くしかない。

俺は、子供たちにゲームを通して、生きていく上で大切な『リスクとリターン』の感覚、そして『自立心』を伝えているつもりだった。それが、この村での俺の役割の一つなのかもしれない、とふと思った。

夕暮れ時、遊び疲れた子供たちが家路につくのを見送りながら、俺は空を見上げた。

祭りの準備は着々と進んでいる。だが、それ以上に、この村の子供たちの心に、少しでも何かを植え付けられたのなら、それもまた一つの収穫なのかもしれない。

(祭りの企画に子どもたちも参加してもらおう)

騙すつもりが、いつの間にか育てる方向に変化していた。

GEMINI「G、村祭り」

祭りの当日、聖地クローバーは朝から異様な熱気に包まれていた。飾り付けられた提灯が風に揺れ、普段は静かな村のあちこちから、賑やかな話し声や笑い声が聞こえてくる。

俺が提案したダイスを使ったゲームやイベントの屋台は、予想以上の盛況だった。

「さあさあ、一丁勝負！ サイコロの出た目で景品ゲットだ！」

俺の威勢のいい掛け声に、老若男女問わず、村人たちが興味津々といった表情で集まってくる。普段は質素な生活を送っている彼らにとって、サイコロの出目一つで一喜一憂するこの単純なゲームは、新鮮な刺激だったようだ。

特に人気を集めていたのは、「グリーンさまの御籤ダイス」と名付けたコーナーだ。巨大なサイコロを振ってもらい、出目に対応した「お告げ」と称したメッセージを面白おかしく読み上げるというものだ。

「むむむ……出ましたのは『3』！ これは『迷わず行けよ、行けばわかるさ』というお告げであります！」

俺が大げさな口調でそう言うと、周りの村人たちから笑いが起こる。普段は真面目な顔をしている村の古老たちも、子供のように目を輝かせてサイコロを振っていた。

子供たちも負けていない。俺の提案で、彼らは自分たちで考えた露店をいくつか開いていたのだ。

竹で作った輪投げや、的当てゲーム、そして、村で採れた山菜を使ったお菓子や飲み物の販売など、そのアイデアは様々だ。

最初は戸惑っていた子供たちも、自分たちの店に村人が集まり、楽しそうにお金を使ってくれるのを見て、みるみるうちに自信をつけていった。

「いらっしやいませ！ 僕が作ったクッキー、美味しいですよ！」

「こっちは金魚すくいだよ！」

子供たちの元気な声が、祭りの活気をさらに高めていく。大人たちは、そんな子供たちの姿を見て、目を細めて微笑んでいた。

祭りが最高潮を迎えたのは、夜になってからだった。村の中央の広場には大きな篝火が焚かれ、村人たちは輪になって踊り始めた。

その表情は明るく、普段の慎ましやかな雰囲気とはまるで別人だ。

「ユウさん、ありがとう！ こんな楽しい祭り、初めてだよ！」

酒を酌み交わしながら、村の若い男が満面の笑みで俺にそう言った。

「ああ、楽しそうで何よりだ」

俺もつられて笑った。この祭りを通して、村人たちの間に、これまでにはなかった開放感と連帯感が生まれたように感じた。保守的だった彼らの心に、小さな変化の種が植えられたのかもしれない。

子供たちが主体となって店を切り盛りする姿は、まさに小さな起業家たちのようだった。彼らは、遊びを通して、お金を稼ぐ喜びや、人に喜んでもらうことの楽しさを学んだはずだ。

祭りの終わりが近づき、名残惜しそうな雰囲気が漂う中、俺は村長リュウの姿を探した。少し離れた場所で、リュウは静かに祭りの様子を見守っていた。その表情は、いつもの厳しさの中にも、ほんのわずかながら安堵のようなものが混じっているように見えた。

祭りの成功は、俺とリュウの関係にも、微妙な変化をもたらしたのかもしれない。少なくとも、俺がこの村の一員として、少しは認められたような気がした。

夜空には満月が輝き、祭りの熱狂の余韻が、静かに村を包み込んでいた。聖地クロバーの夜は、いつもより少しだけ、明るく、そして温かかった。

GEMINI「H、責任者」

祭りの熱狂が冷めやらぬ翌日、俺は村長リュウに呼び出された。昨日の今日で、まさか叱責でも受けるのかと、少しばかり身構えながら彼の家を訪れた。

「ユウ、昨日の祭りは盛況だったようだな」

リュウはいつものように静かに言ったが、その声にはわずかながらも柔らかな響きが感じられた。

「ええ、おかげさまで」

「村人たちが楽しんでいたのは確かだ。貴様の企画は、確かに彼らにとって良い刺激になったのだろう」

意外にも、リュウは祭りの成功を認めているようだった。だが、彼の言葉はそこで途切れた。

「だがな、ユウ。貴様が村に持ち込んだものは、祭りだけではない」

リュウの表情が、再びいつもの厳しさに戻る。

「貴様は、ダイスという遊びを村に広めた。祭りの間だけならまだしも、今では子供から大人まで、暇さえあればサイコロを振っている」

確かに、祭りの後も、村ではダイスを使った遊びがちょっとしたブームになっていた。子供たちはもちろん、大人たちも仕事の合間にサイコロを囲んで談笑する姿が見られるようになっていた。

「それが何か問題でも？」

俺が問い返すと、リュウは重々しく頷いた。

「問題は大いにある。この村は、国からの資金援助を受けて、ある実験を行っている。それは、この閉鎖的な環境の中で、自立し、社会に貢献できる人材を育成するというものだ」

リュウの言葉に、俺は初めてこの村の真の目的を知った。単なる隠れ里のような場所ではなかったのだ。

「だが、長年続けてきたにも関わらず、目覚ましい成果は出ていない。それどころか、近年は資金の打ち切りも検討されていると聞いている」

リュウの表情は険しい。

「そんな状況で、貴様が持ち込んだダイスという安易な娯楽は、村人たちの意識をさらに遊戯的な方向へと向かわせるのではないかと危惧しているのだ」

リュウの言葉は、俺の胸に重く響いた。まさか、自分が何気なく持ち込んだ遊びが、村の存続に関わる問題を引き起こす可能性があるとは。

「つまり、俺がダイスを流行らせたことの責任を問われている、と？」

俺がそう問い返すと、リュウは静かに頷いた。

「その通りだ。祭りの成功は評価する。だが、その功罪をしっかりと見極めなければならない」

リュウは立ち上がり、窓の外の日々を見つめた。

「そこでだ、ユウ。貴様に、この村の重要な課題を解決する手伝いをしてもらいたい」

意外な言葉に、俺は息を呑んだ。

「それは……？」

「村の基幹産業となる林業を活性化させるための、山道の整備だ。長年放置されていた山道は荒れ果て、木材の搬出もままならない。これは、長年の懸案事項であり、村の経済を立て直すためには不可欠な事業だ」

それは、祭りのような一時的な娯楽とは違い、長期にわたる骨の折れる仕事であり、莫大な資金も動く一大プロジェクトだ。

「貴様の行動力と、祭りで示した企画力に期待したい。だが、これは失敗が許されない。前例のないことばかりだろう。どうする、ユウ。怖じ気づいたか？」

リュウの言葉は、俺の心臓を掴むように重かった。娯楽で人を集めるのとは訳が違う。これは、村の未来を左右する責任ある仕事だ。

「.....よく分かりません」

正直な気持ちを吐露した。林業の知識もない。山道整備の経験もない。失敗したら、今度こそ村にいられなくなるだろう。

「だが.....」

俺はリュウの目をしっかりと見据えた。

「失敗を恐れて、何もしないでいる方が、もっと怖い気がします」

リュウは、俺の言葉にわずかに目を細めた。

「ならば、やってみるか。前例など、あってないようなものだ。貴様の才覚で、この難局を乗り越えてみせろ」

重い、だが同時に期待のこもったリュウの言葉が、俺の背中を押した。祭りの熱狂から一転、今度は村の未来を背負うという、途方もない責任が俺の肩にのしかかってきた。ギャンブラー、ユウの新たなゲームが、今、始まろうとしていた。

GEMINI「I、逃亡」

山道整備の責任者を任されて数日経った。村人たちの期待の眼差しが、日に日に重くのしかかってくるように感じる。「ユウさんならきっとやってくれる」「祭りを成功させたんだ、大丈夫だ」そんな言葉が、まるで呪いのように俺の耳にまとわりつく。

これまで、自分の人生は自分のものだと、好き勝手に生きてきた。失敗したら、その時考えればいい。最悪、逃げ出してしまえばそれで済む。そんな安易な考えで、いつもその場しのぎの選択をしてきた。

だが、今回は違う。この山道整備は、村全体の未来を左右する一大事業だ。俺の失敗は、村人たちの生活を、ひいては彼らの人生を狂わせてしまうかもしれない。そう考えると、これまで感じたことのない重圧に押し潰されそうになる。

村人たちは、長年この問題を解決できずにいたらしい。だからこそ、よそ者の俺に大きな期待を寄せているのだろう。だが、俺にそんな大役をこなせる力があるのだろうか？正直、自信なんてかけられない。

整備計画を立てようにも、林業の知識も、土木工事の経験もない。村人に意見を求めても、「昔からこうだった」「先祖代々このやり方だ」と、前例ばかりを持ち出して、新しいことに踏み出そうとしない。彼らに変化を恐れる気持ちが、今になって初めて理解できた。失敗が許されない状況で、見慣れない方法に手を出すのは、確かに怖いだろう。

そんな村人たちの姿を見ていると、自分がますます無力に思えてくる。彼らは、少なくともこの土地で、先祖から受け継いだ知恵と経験を頼りに生きてきた。

それに比べて、俺は何だ？

一攫千金を夢見てギャンブルに明け暮れ、失敗しては逃げ出すことばかり考えてきた、ただの落ちこぼれじゃないか。

祭りの成功で、村人たちは俺を「すごい奴」扱いするようになった。だが、それは勘違いだ。祭りは、たまたま上手くいっただけの、一時の気まぐれに過ぎない。本当の俺は、こんな重責を担えるような人間ではない。

夜、一人ボロ小屋の隅で丸まっていると、逃げ出したい衝動が抑えられなくなった。

この村を離れて、またどこかで気楽な生活を送りたい。失敗の責任を背負うくらいなら、見知らぬ土地で野垂れ死んだ方がマシだ。

リュックに必要なものだけを詰め込み、静かに小屋を抜け出す。

月明かりの下、寝静まった村の家々が、まるで俺の逃亡を見送っているかのように佇んでいる。

（ごめん……やっぱり、俺には無理だ）

心の中でそう呟きながら、俺は誰にも気づかれないように、村の境界へと足を向けた。後ろを振り返ることはなかった。

期待の眼差しも、初めての「すごい奴」扱いも、今の俺にはただただ重荷でしかなかった。

自分の弱さと向き合うことから逃げるように、俺は聖地クローバーを後にした。

GEMINI「J、トークのブーメラン」

夜明け前の薄暗い山道を、俺はひたすら歩いていた。背後から聞こえるはずのない村の喧騒が、幻聴のように耳に残る。逃げるように飛び出してきたものの、行く当てもなく、ただあてもなく足を動かしているだけだった。

どれくらい歩いただろう。東の空が白み始めた頃、背後から聞き慣れた声が俺を呼んだ。

「ユウさん！」

振り返ると、息を切らせたサクラが、小さな体を揺らしながらこちらに向かって走ってくるのが見えた。まさか、子供が一人でこんなところまで追いかけてくるとは思わなかった。

「サクラ……どうしてここに？」

俺が問いかけると、サクラはハーハーと肩で息をしながら言った。

「みんな、心配してるよ！ いきなりいなくなっちゃうなんて！」

村人たちが俺を探しているのか。その事実、胸の奥がチクリと痛んだ。

「俺は……この村にはいられないんだ」

そう言うのが精一杯だった。自分の弱さや、責任から逃げ出したことなど、子供にどう説明すればいいのか分からなかった。

サクラは、俺の言葉をじっと見つめていた。その大きな瞳には、悲しみのような、あるいは諦めのような光が宿っているように見えた。

そして、小さな唇を震わせながら、サクラは言った。

「ユウさんは、いつも言ってたよね？『迷ったらダイスを振れ』って」

その言葉が、まるで鋭い刃のように俺の胸に突き刺さった。それは、俺が祭りの時や、

子供たちと遊んでいる時に、何気なく口にしていた言葉だった。まさか、こんな形で自分に返ってくるとは思わなかった。

「.....それは、ただの.....」

言い訳を探そうとしたが、言葉が見つからない。自分が言ってきたことの重みが、今になってズシリと感じられる。

サクラはさらに続けた。

「『やる、やらないを決めることに意味がある』って。『偶然を必然にしろ』って.....ユウさんは、色々なことを教えてくれたじゃない」

サクラの小さな声は、山々に吸い込まれるように消えていく。だが、その言葉一つ一つが、俺の心に深く刻まれた。

「それに.....『なにがおきるか、グリーンさまも知らねえんだろ？ 分からないのは神も人も同じ』って、ユウさんが言ってたから、ユウさんがいなくなっちゃうなんて、誰も思ってたんだよ」

サクラの言葉は、完全に俺の言葉のブーメランだった。自分が無責任に発した言葉たちが、今になって、逃げ出した俺を追い詰めてくる。

返す言葉が見つからず、俺はただ立ち尽くしていた。サクラの瞳は、まっすぐに俺を見つめ、何かを訴えかけている。

「さあ、ユウさん」

サクラは小さな手を差し出した。

「迷ったらダイスを振るんでしょ？ それで、これからどうするか、決めたらいいんだよ」

差し出されたサクラの小さな手と、彼女の純粋な瞳を見ていると、逃げ出した自分が本当に小さく、そして醜く思えてきた。

俺は、ゆっくりとポケットから愛用のダイスを取り出した。

手のひらに乗せた2つの100面ダイスが、いつもより重く感じられた。

サクラの言う通りだ。迷った時は、いつもダイスに決めてもらってきた。今更、その原則を曲げるわけにはいかない。

深呼吸を一つ。そして、俺はサイコロを握りしめ、地面に投げつけた。

クリティカルの3が出た。

万馬券と同じだ。

だが、今回は無駄遣いせずに、堅実に進めるぞ。

俺は聖地クロバーに戻る決意をした。

GEMINI「K、戦略」

サクラに諭され、村に戻った俺は、山道整備という途方もない課題に、これまでとは違う向き合い方を強いられていた。

これまでは、その場の思いつきや、一発逆転のギャンブルに頼ってきた人生だったが、今回はそうはいかない。

村長リュウに改めて話を聞くと、この山道整備は、単に道を綺麗にするだけでなく、荒れた山を再生させ、持続可能な林業を確立するための、十年単位の壮大な計画の一部だという。

これまで、村人も何度か挑戦してきたが、その場しのぎの対応ばかりで、根本的な解決には至らなかったらしい。

俺は、まず現状を把握することから始めた。荒れた山道を実際に歩き、どこが問題なのか、何が必要なのかを自分の目で確かめた。村の古老たちに話を聞き、彼らの経験や知識を借りた。

そして、これまでの行き当たりばったりの行動を反省し、「状況を把握して、具体的な計画を立て、実行しては修正する」という、当たり前だがこれまで意識してこなかった戦略的なアプローチを取り入れることにした。

まずは、短期的な目標として、最も通行の困難な区間を部分的に修復し、木材の搬出を試験的に行う計画を立てた。村人たちに計画を説明し、それぞれの得意なこと、できることを分担してもらった。

最初は戸惑っていた村人たちも、俺が具体的な指示を出し、進捗状況を共有することで、徐々に協力体制を築けるようになっていった。うまくいかないことがあれば、皆で原因を考え、計画を修正する。

その過程で、俺は瞬間的な勝負ではなく、長い時間をかけて目標を達成するための粘り強さを学んだ。そして、それを村人たちにも伝えていった。

特に熱心に俺のやり方を学んでいたのが、サクラだった。持ち前の聡明さで、俺の指示をすぐに理解し、率先して作業に取り組んだ。

彼女は、俺が教えた「戦略」の考え方を、子供たちにも分かりやすく伝え、彼らを巻き込んで様々な活動を始めた。

数年後、山道は見違えるほど整備され、村の林業は徐々に活気を取り戻し始めていた。村の経済も安定し、子供たちの笑顔が増えたように思う。

そんなある日、リュウが俺に、驚くべき事実を打ち明けた。

「実はな、ユウ。アメリカにも、かつてリリーさまが作ったとされる村があったらしい」「アメリカに？」

初耳だった。

「ああ。だが、そちらの村は、リーダーとなる人材が育たず、やがて離散してしまったようだ」

リュウの言葉に、俺はハッとした。この聖地クローバーも、同じ道を辿る可能性があったのだ。

「そこでだ、ヨウ。お前に育ててもらったサクラを、アメリカの村に送り、立て直しを手伝ってもらいたいと考えている」

信じられない思いだった。サクラが、海を渡り、リーダーシップを発揮するというのか。

だが、数年間の彼女の成長を間近で見てきた俺には、それが決して不可能ではないと思えた。彼女は、俺から戦略的な思考を学び、自ら考え、行動する力を身につけた。

そして、その日が来た。小さな体に大きな希望を背負い、サクラは村人たちの見送りを受けながら、アメリカへと旅立っていった。

空港で見送るサクラの瞳は、未来への希望に満ち溢れていた。かつて、ただのギャングブラーだった俺が、戦略的な行動を学び、それを教えたことで、一人の少女の人生、そして遠い異国の村の未来を動かすことになるとは、想像もしていなかった。

俺は、空を見上げた。十年という長い時間をかけて、ようやく見えてきた成功の兆し。それは、一瞬の興奮よりも、ずっと価値のあるものだと、俺は今、心からそう思っている。

GEMINI「L、訪問」

サクラがアメリカへ旅立ってから数年後。聖地クローバーの林業は安定し、村には穏やかな活気が戻っていた。俺も、すっかりこの村の一員として、山と共に生きる日々を送っていた。

そんなある日、村に見慣れない若い女性が訪ねてきた。どこか懐かしい雰囲気を持つ彼女は、リュウの紹介によると、かつてアメリカに存在した、リリーの教えを受け継ぐ村の離散した村人の子孫だという。名前はエミリーといった。

エミリーは、聖地クローバーの噂を聞きつけ、はるばる海を渡ってきたらしい。彼女の故郷の村は、リーダーシップを発揮できる者が現れず、徐々に人々が離れていき、今はもう誰も住んでいないという。

「私たちの村は、なぜ滅んでしまったのでしょうか？」

エミリーは、悲しみを湛えた瞳でリュウに問いかけた。リュウは静かに、聖地クローバーがかつて同じような危機に瀕していたこと、そして、サクラがアメリカへ渡り、懸命に村の立て直しに取り組んでいることを話した。

エミリーは、食い入るようにリュウの話を聞いていた。特に、サクラが俺から戦略的な思考を学び、村を導いているというくだりになると、彼女の目に強い光が宿った。

「私も、この村で学び直したいのです」

エミリーは、真剣な表情でリュウに頭を下げた。

「失われた私たちの村の教えを、もう一度学び、いつか自分の故郷を再建したい。サクラさんのように、人々を導ける人間になりたいのです」

リュウはしばらく考え込んだ後、静かに頷いた。

「良いだろう。この村で、お前が求めるものを探すといい」

こうして、エミリーは聖地クローバーに滞在することになった。彼女は、熱心に村の

生活に参加し、村人たちの話に耳を傾け、俺の仕事ぶりを注意深く観察した。特に、子供たちに戦略的な思考を教える俺の姿を見て、多くのことを学んでいるようだった。

ある日、エミリーは俺に話しかけてきた。

「ヨウさん、サクラさんは、どのようにしてあんなに強いリーダーシップを身につけたのですか？」

俺は、サクラとの出会い、祭りのこと、山道整備のこと、そして、俺が彼女に教えた戦略的な考え方について、ゆっくりと語った。

エミリーは、真剣な目で俺の話を聞き終えると、深く頷いた。

「私たちの村に足りなかったのは、まさにそれだったのかもしれませんが。目の前の問題にただ対処するだけでなく、長期的な視点を持ち、計画的に行動すること。そして、何よりも、人々を信じ、共に目標に向かって進む力……」

エミリーは、聖地クローバーでの日々を通して、失われた村の再建に必要な種を見つけ始めたようだった。彼女の目には、かつての悲しみだけでなく、未来への希望の光が宿り始めていた。

遠いアメリカで頑張るサクラ、そしてこの聖地クローバーで学びを深めるエミリー。かつて分離してしまった二つの村の繋がりが、今、再び結びつこうとしている。それは、魔女リリーが蒔いた種が、時を超えて新たな芽を出そうとしている証なのかもしれない。俺は、そんな二人の未来を、静かに見守りたいと思った。

GEMINI「M、大勝負」

エミリーを迎えて数週間後、アメリカから彼女の村の長老たちを始めとする訪問団が、聖地クロバーにやって来た。彼らは、エミリーの話聞き、この小さな村がどのようにして困難を乗り越えてきたのか、直接学びたいと願っていた。

村を代表して、俺が中心となり、歓迎と接待の準備を進めた。祭りの経験を活かし、村人たちと協力して、心のこもった食事を用意し、伝統的な歌や踊りを披露する場を設けた。アメリカから来た訪問者たちは、聖地クロバーの温かいもてなしに深く感動している様子だった。

特に、俺が子供たちに戦略を教える様子や、村人たちが協力して林業に取り組む姿は、彼らにとって大きな学びとなったようだ。エミリーも、自信に満ちた表情で、この村で得た知識や経験を語っていた。

数日間の交流は実り多いものとなり、別れの際には、互いの村の再建に向けて、固い握手を交わし合った。アメリカの訪問者たちは、希望に満ちた表情で故郷へと帰っていった。

だが、この歓迎の様子は、エミリーが故郷の友人たちに送った SNS の投稿によって、思わぬ形で広まってしまった。聖地クロバーの美しい自然や、村人たちの温かい交流は多くの人々の目に触れ、小さな話題となったのだ。

その SNS の投稿を見た人物がいた。それは、遠い都会で、俺をずっと探し続けていた借金取りだった。

数週間後、平穏な日常を送っていた聖地クロバーに、数台の黒塗りの車が乗り入れてきた。中から降りてきたのは、いかつい風貌の男たち。彼らは、村人たちの訝しむ視線をものともせず、俺の居場所を突き止めると、有無を言わず俺を捕まえた。

「見つけたぞ、ユウ！」

男たちの冷たい視線と、聞き慣れた脅迫的な声が、俺の平穏な日々を打ち砕く。まさか、こんな形で、過去の清算がやってくるとは思ってもいなかった。村人たちは、突然の出来事に戸惑い、ただ立ち尽くすことしかできない。俺は、男たちに引きずられながら、何も言えずにいた。

アメリカとの交流は成功し、村の未来に光が見え始めた矢先の出来事だった。だが、SNSという現代のツールが、図らずも俺の過去を呼び覚ましてしまったのだ。連れて行かれる車の中で、俺はこれまでの自分の人生を振り返った。ギャンブルに明け暮れ、借金を作り、逃げるようにこの村に辿り着いた。そして、ようやく見つけた居場所、再び過去に捕らわれてしまうとは。

聖地クローバーでの日々は、決して無駄ではなかった。村人たちとの交流を通して、俺は多くのことを学び、少しは変わったつもりだった。だが、過去の重荷から逃れることは、やはりできなかったようだ。

これからどうなるのか、全く見当もつかない。だが、一つだけ確かなことは、俺の人生は、またしても予想外の方向へと大きく動き出したということだった。今度のゲームは、これまで以上に厳しいものになるだろう。

GEMINI「N、約束」

連行される車の中で、俺は覚悟を決めていた。逃げることはもうできない。過去の清算をしなければ、この先もずっと、影に怯える人生を送ることになるだろう。

連れて行かれたのは、見慣れない倉庫のような場所だった。薄暗い部屋には、強面の男たちが数人待ち構えており、その奥には、いかにも悪そうな笑みを浮かべた男が座っていた。かつて、俺に金を貸した張本人だった。

「よう、ユウ。ずいぶんと長い間、隠れていやがったな」

男の声は、ねっとりとしていて、鳥肌が立つほど不快だった。観念した俺は、素直に謝罪し、借金を返す意思があることを伝えた。男は、俺の言葉を鼻で笑い、法外な利息を上乗せした金額を提示してきた。途方もない金額だったが、ここで逆らっても無駄だと悟った。

「必ず返します」

絞り出すようにそう言うと、男はニヤリと笑った。

「ほう、どうやってな？ お前には、そんな金を作るツテも才能もないだろうが」

男の言葉は、凶星だった。これまでの俺は、ギャンブルで一攫千金を狙うことしか考えてこなかった。地道に働くなど、考えたこともなかった。

その時、ふと聖地クローバーでの日々が頭をよぎった。山道整備、村人との協力、子供たちに教えた戦略。あの場所で、俺は確かに変わることができた。

「村に戻って、そこで学んだことを活かして稼ぎます。そして、必ず借金を返済します」

俺の言葉に、男たちは顔を見合わせた後、嘲笑した。

「田舎の貧乏村で、一体何ができるってんだ？」

「それでも、やります。それが、俺が犯した罪を償う唯一の方法です」

俺の強い決意を感じ取ったのか、男はしばらく考え込んだ後、提案をしてきた。

「まあいいだろう。お前の言うことを信じてやろう。ただし、期限は決める。それまでに全額返済できなければ、ただでは済まんぞ」

男は、具体的な返済計画と期日を提示してきた。それは、決して楽な道のりではないが、不可能ではないと思える範囲だった。

その日のうちに、俺は解放された。男たちの監視はつくものの、聖地クローバーに戻ることを許されたのだ。

村に戻ると、リュウをはじめとする村人たちが、心配そうな表情で俺を迎えてくれた。事情を説明すると、彼らは理解を示し、俺の再出発を応援してくれた。

「ヨウなら、きっとやり遂げられると信じている」

リュウの力強い言葉が、俺の背中を押してくれた。

サクラだって異国の地で踏ん張っている。俺はもう逃げない。

GEMINI の初稿の感想

情報が不足している後半は、「なんやかんやあって」レベルの抽象度。
ハッキリ言って面白くない。

次はシナリオで絵が浮かぶところまで持っていく！

企画書「ギャンブラー、聖地に紛れ込む」20250407

著 者 ELYE

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
